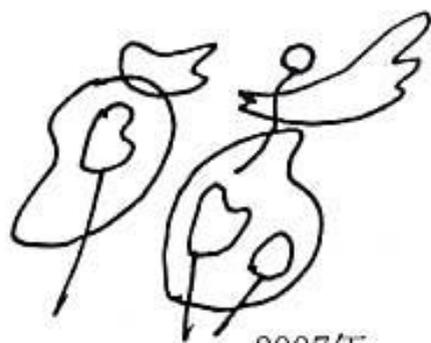


空



2007年

SORA 20号

晴夜 (20) | 1

柴田 佐知子

鷹筑豊渡る廃坑に闇閉ぢ込めて

たて横に坑道沈め芒原

身にしむや炭坑節の煙突も

高千夏子さん九月二十三日逝去

龍つれて淵に潜みし友ならむ

死者に言ふごとき日記や夜長し

昨日よりふくよかなりし菊人形

虫籠を置く四方より虫の声

大樹より風の起こりし里神楽

夜神楽の鬼が山裾踏み鳴らす

鏡

高倉和子

悪相となりて走れる羽抜鶏

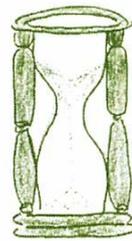
母校への道均されし九月かな

誘はるるままに進める芒原

林檎赤し嫌ひなものは捨ててゆく

本堂に正しく座る秋気かな

望郷や柿に渋みの少しあり



紅葉のはじめ光に透けてをり

何気なく拾ひてゐたる木の実かな

接待の皿美しき冬隣

枯草の匂ひ竈の匂ひとも

樹の中の風騒がしき神迎へ

一筋の雲の白さや冬立てり

隙間風鏡の中を通りけり

横顔に飽きてゐたりし日向ぼこ

襟巻のうしろは闇の中なりし

先日、長年愛用している歳時記が見つからず、落ちこんでいた。別の歳時記ではじっくりこないものである。俳句も思うように出来ない気がした。

幸い、後日見つかり、改めて頁を繰ってみた。春、夏、秋…使ったことのない季語の多さに今さらながらに気付く。いつの間にか自分の中で好きな季語や作句しやすい季語に偏っていたようだ。反省も込めてこれから年末、新年と色々な季語に挑戦してみようと思う。

星流る

中田みなみ

朝の道夕日の道の野ばらの実

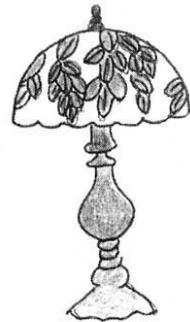
みまかりしころ球根を植ゑをりし

秋愁ひシャボンの泡に包みけり

諦めのくる木犀の風のと

碑の裏の空白秋の風

菊枕まくらの上に重ねけり



・高千夏子さんを偲びて

去る九月二十三日半年の闘病の末、千夏子さんは逝かれた。出棺の時以外冷静でいられたのは、もう苦しまなくても済むことに、ほっと寧ろ覚えたからであつた。

千夏子さんは稀な記憶力の持ち主で、私が自分の第一句集を編んでいたときのこと、句稿にまだ抜けている句が沢山あると、注意して下さり、大いに助かったことがあつた。「昔の句会のノートから見つけたの？」と訊ねると、「いいえ、殆んど覚えてはいるのです。」と、私すら忘れかけていた数句をすらすら暗誦され

老人の日わが食ぶるケーキ選つてをり

灯を消して親しむ秋の入江の灯

菊人形檜葉の下着で届きけり

川光る十一月の葡萄棚

大根が引き合ふちから出しにけり

神迎へ菰の帯巻く並木松

転げ出て冬日の届くナフタリン

山茶花の咲きしと声す散りてをり

蓮の穴黒くなりたる一の西

たのには本当に驚いてしまった。

俳句雑誌社から原稿や句の依頼がある度に、目を通して下さいと電話がくる。自分の目で完璧よと応じると、逢い度いからと云う。

千夏子さんはコーヒー、ジュースを好まないで、前もって長話の出来るレストランや料亭を調べておき、案内して下さる気の配りようだった。一度、職場の人に宵の口は静かだからと紹介されたという、新宿の地下のバーに行ったことがあった。客は止り木に一人きり。隅のテーブルをとり、二人共初めてなので、ウーロン茶を注文して、ピーナツをつまみながら、薄暗い室内を見廻し、この雰囲気、句になりますねえと、頷き合ったのも懐かしい思い出となった。

淋しさはあとから来る。千夏子さんからは、長い歲月、本当に純粹な愛情を頂いた。

人を悼むということは、死者から受けた愛に感謝して、生きることだと沁々思ふこの頃である。

ちちはは

荒井千佐代

頭上にシリウス海上に大花火

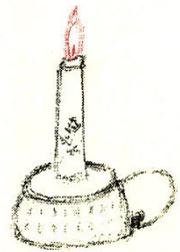
千羽鶴千折りて秋立ちにけり

秋日傘閉ぢて華僑の路地を抜く

とどこほりなき連絡網や星月夜

露けしや猫のつけたる銀の鈴

島を打つうしほ良夜の書齋より



保育日報を書いている私の傍に、生後十ヶ月のゆりちゃんがお坐りしている。手に持っているお煎餅がなくなると、アーアーと声をあげ、もう一枚と催促する。この子は母親が授乳に来る午後三時迄の昼間を、ほぼ毎日この事務室で私と一緒に過ごす。

〈婦家隠坐〉という言葉を、先日倉田紘文先生に教わった。その事についてお書きになった御文のコピーも戴いた。文中の一部を引いてみる。『婦家隠坐』とは、辞書で引くと「物の盛りを過ぎて末に残ったもの」とある。――中略――相田みつをはこう言っている。「婦家隠坐とは、自分の家に帰って、自分の座布団の上にくったり坐ることです。つまり、自分が自分の落ちつくべきところに落ち着くこ

なんとなく秋の扇を持ち歩く

俎板の真ん中うすし秋桜

三方に山置く暮し胡麻を打つ

ちちははの骨を思へり雁の頃

かまつかや父母のなき世に慣れずをり

身を載せて押せる落款豊の秋

離陸順待つ間の釣瓶落しかな

保育士の声よく通る柿日和

弔ひのきのふもけふも照葉かな

とです。自分が自分になることです。トマトがトマトになり、メロンがメロンになることです。トマトがメロンになろうとするから不安なんです。」と。この言葉はなんとも分かり易く、自然に和らいだ気持ちにしてくれる。「自分が自分になること」：思わず頷かされてしまう。』自分が自分になること：。家庭での自分、大学総務課保育所での自分、俳句の世界での自分、カルチャー教室でり自分、ミサ奏者である自分等々。どこに於ても自分は自分であるつもりでいるが。

私の傍で、すやすやと午睡中のゆりちゃん。諭え乳児と言えど、この子の一番安心する場所があるだろう。約十時間を保育所で過ごすこのゆりちゃんの穏坐は。勿論、両親と過ごす家庭であるはずだ。

十二月、待降節に入る。主の降誕を迎える準備の時だ。プレゼントは何にしよう。ケーキをどうしよう。ドレスはどれにしよう…ではなく、心を清らかにする準備の時。私の場合、座布団にはなく、神の前に跪き、何時間でも祈らねばなるまい。

空作品品評

柴田佐知子

秋草に秋草めいて坐りけり

酔ふごとく花野と声にしてゐたり

服部 早苗
青木 朋子

一句目、秋のかそげき気配が身の内にまで流れてくる繊細な作品。「秋草めいて」の措辞が秀抜である。かたや朋子さんは可憐な秋の草花の広がりを「酔ふごとく」と感覚的とらえ、花野と一体になったような情感がある。二句ともたおやかな感覚を通して秋が感じられ瑞々しい。

還暦の男と女天の川

中条さゆり

人生五十年と言っていた時代であれば異なる解釈になるかもしれない。来し方静かに語り合う還暦の二人というように。ところが現代はそうは枯れてはいまい。「還暦の男と女」とぶつきら棒に言葉が置かれているが、艶な風情がそこはかとなく漂う。何も言わない面白さがある。

青瓢重きに耐えて下がりけり

田代 貞枝

瓢箪はごく自然に垂れているだけなのだが、「重きに耐えて」と仰々しくいったところが面白い。

海へ出る水の片寄る野菊かな

森 裕子

骨太な詠みぶりである。「水の片寄る」と大きく把え、巧み。配した眼前の野菊が鮮やかである。

秋うらら広き芝生のクラス会

遠山のり子

秋日をたつぷり置いた芝生がクラス会を乗せていよいよ穏やかな明るさに満ちている。余計な説明を排したスツキリとした仕上りがいい。

夕紅葉この地に下りし天女あり

犬丸 勝子

天女伝説が残る地なのであろう。三橋鷹女の「この木登らば鬼女となるべし夕紅葉」とは趣を異にした優美な句である。

華麗なる稲妻ひとりの指を組む

永原 朱

いきなり置かれた「華麗なる稲妻」が強い印象を与え、場面がまさに華麗に浮き上がってくる。鮮やかな言葉の選択である。

さくらんぼいまさら恋の噂など

鎌田 高暢

子と共に去りし大きな夏休み

萩 悠子

自然薯の掘りあげられし山の声

片田 理枝

露霜を踏んで下りし北穂高

堤 堅策

炒粉笑つて噴いた母のこと

每熊美智子

ささやけば嬰うなづいて秋桜

浦川 末子

鎌田さんの句、「さくらんぼ」が愉快だ。萩さんの句は「大きな夏休み」という表現に実感が籠もっておりうまい。片田さんは下五に据えた「山の声」に感心した。思い切りのいい詠みぶりである。堤さんは「霜露」と「北穂高」が響きあったスケールの大きい句である。每方さんの句の楽しさは格別だ。浦川さんの赤ん坊はまるで何でも分かっているようで可愛いらしい。以上は今回初投句の五人である。「空」に豊かな個性が加わった。

空集

柴田佐知子選

神の水受くるに露の杓ひとつ

行橋

安武晨子

供花替へてみほとけに秋奉る

君恋ふる歌碑へ翳曳き雁の雨

山の風もらひ過ぎたるからす瓜

ひよんの笛人語を解す犬に吹く

音の出しことにおどろきひよんの笛

遠嶺恋ふ色となりたる烏瓜

守宮にも名前の付いて夜の秋

原爆忌舗装いちまい下は土

長崎

鳳

蛭

華

ぎす鳴くや検証中の事故現場

修羅像のごと肘折つて蟬佛